

# 大江健三郎「燃えあがる緑の木」成立の背景

——安部公房の「警告」——

田 鎖 数 馬

## 一

大江健三郎「燃えあがる緑の木」は、『救い主』が毀られるまで——燃えあがる緑の木 第一部（平成五年九月『新潮』）、「揺れ動く」燃えあがる緑の木 第二部（平成六年六月『新潮』）、「大いなる日に」——燃えあがる緑の木 第三部（平成七年三月『新潮』）の三部によって構成される長編小説である。長大で、入り組んだ話であり、梗概を示すことは困難であるが、本論と関わる部分に限定して、紹介する。

——四国の森に囲まれた村で百年近く生きてきたオーバーの死後、サッチャンと隆とが中心となって、この村に集う人々とともに「魂のこと」に関わる活動を行うことが、作品の骨格である。サッチャンは、オーバーに育てられ、青春期

に男性から女性へと「転換」した両性具有者で、この作品の語り手でもある。隆は、この村で生まれ育った父を持つが、カリフォルニア生まれで、少年期を主に海外で過ごし、帰国して大学に入り、学生時代にはある「革命党派」に属していたが、いつしか「魂のこと」をしないと願うようになり、村に移住してきた。オーバーは、ギー兄さんと呼ばれる人物に村の屋敷と農場とを譲るつもりであったが、ギー兄さんは十年前に非業の死をとげたので、隆をそのギー兄さんの後継者と見込んで、隆に、村の伝承を教え、屋敷と農場の管理を任せる。やがて、隆が、ギー兄さんと周囲からも呼ばれるようになり（論者注——そのため、以下では、隆の名を記さなければ分かりにくい場合を除いて、隆のことをギー兄さんと記す）、「救い主」と目されるようになる。オーバーの死後、サッチャンとギー兄さんは、教会の建設を計画

し、その教会の「しるし」として、ウイリアム・バトラー・イエイツの「揺れ動く」という詩の中にある「片側は緑に覆われている」露が滴っている木、もう片側は、それが燃え上がっている」という「暗喩」に基づく「燃えあがる緑の木」の画像を採用する。こうして、ギー兄さんの教会の活動が始まり、会員は増加していく。ギー兄さんは、自らが「救い主」であるとは思えなかったが、「本当の「救い主」を準備する、仮の「救い主」役として」「教会を主宰して行こう」と考えるようになる。そして、農場を拡大し、礼拝堂を完成させるなどして、活動を広範囲に展開していく。しかし、それに伴って、教会や農場の外部の人間との軋轢や、内部での分裂が目立つようになる。そうした中、ある日、ギー兄さんは、「①農場を拡大し礼拝堂を建設したことはあやまちでした。本当に魂のことをしようとながう者は、水の流れに加わるよりも、一滴の水が地面にしみとおるように、それぞれ自分ひとりの場所で、「救い主」と繋がるよう祈るべきなのだ」と語り始める。「この土地から「燃えあがる緑の木」の教会を引き払うこと」「本拠はここにないと明確にして」、その上で、一部の教会員が巡礼の旅に出発する意志を固めていた。その巡礼団に加わって「魂のことに専念する生き方に戻る」と思うと皆に伝える。ギー兄さんは、こうして、巡礼の旅に出発しようとする。しかし、その直後、ギー兄さ

んが嘗て所属していた「革命党派の、敵対セクトから投石されて」、②ギー兄さんは殺されてしまった。その後、サッチャンは、ギー兄さんとの間の子どもを授かっていたことが分かった。語り手であるサッチャンは、ギー兄さんの葬儀の際に、③教会員が、ギー兄さんの言う通り、四国の村から離れて、「おのおのが辿りつく場所、一滴の水のように地面にしみこむことを目指そう」としたと、「森をふくむこの地域」の「世界モデル」において、そのように「谷間から外に出て行く流れは、生の勾配にそっているはず」と思えたことを最後に語り、この作品は終わる。

「燃えあがる緑の木」という題名は、イエイツの「揺れ動く」の詩に由来している。この詩は、「第一部」「第二部」「第三部」の全てで引用され、かつ、この詩の題名は、「第二部」の題名「揺れ動く」として採用されてもいる。このことを踏まえつつ、後掲の安部公房との「対談」での大江の発言も参考にすれば、「燃えあがる緑の木」は、諸家の指摘する通り、イエイツの詩を基調にした、「世界と人間」の「揺れ動くところ」を書いた作品であったと言える。

そのことを確認するために、「燃えあがる緑の木」から、その「揺れ動くところ」に該当するだろう例を四点挙げておく。第一は、ギー兄さんが、自らに救いを求める人間の期待に応えられないのではないかという不安にしばしば囚われ、

動揺しているという点である。第二は、教会や農場の活動が、村の外部の人間との軋轢や、村の内部での摩擦をよく引き起こしており、その活動に混乱が生じているという点である。第三は、ギー兄さんが礼拝堂で説教を行った時に、神について何も語る事ができずに、しゃがみ込んでしまうことがあったのだが、それを目撃したサツチャンが、ギー兄さんのその余りに惨めな姿に怒り、この村から離れて、農場や教会での活動から一度身を引くものの、その後、心境の変化があり、再び村に戻ってきたという点である。第四は、ギー兄さんが傍線部①のように語り、それを受けて、教会員も、最終的に、四国の村から離れようとしているという点である。この四点から、四国の村の根拠地としての役割や、この村の人間の活動や思いが、「揺れ動くところ」を表現した作品であったと了解できる。

尾崎真理子『大江健三郎全小説全解説』（令和二年九月、講談社）第十二章では、「一九九三年夏」に、文芸記者であった尾崎が大江にインタビューした時に、大江が、「燃えあがる緑の木」について、「信仰対象となる人物のいない時代、そもそも既成宗教の基盤がない国で魂の問題を解決するには、自分たちで宗教のようなものをつくるしかない、と考える人たちの話です」と語ったことを紹介している。ギー兄さんの教会には、既存の「信仰対象となる人物」や、特定の「既

成宗教」のみに依拠するのではなく、手探りで迷いながら、自分たちの力で「魂の問題」の「解決」を目指そうとする人たちが集まっている。こうした迷い多き人々を軸にした話であるからこそ、「世界と人間」の「揺れ動くところ」を表現することが必要であったのだろう。そして、その表現に対する問題意識を形にすることを後押ししたのが、イエイツの「揺れ動く」であった。

ただし、大江が「揺れ動くところ」を表現しようとした外在的な要因を、「揺れ動く」のみに帰着させることもできないだろう。「燃えあがる緑の木」には、先行する作家や思想家等の言葉が夥しく引用されている。大江は、この作品において、様々な言葉を吸収し、創作活動の活力にしようとしていたと考えられる。そのため、「揺れ動くところ」を表現するにあたって、大江のその表現の試みを促す言葉が、他に存在していたと想定できる。

以下では、こうした想定のもと、大江が「万延元年のフットボール」（昭和四十二年一月号）七月『群像』、昭和四十二年九月には、『万延元年のフットボール』を講談社から刊行を発表した時に、安部公房が、大江とは敵対関係にあるのかも知れないとする趣旨の論評を行っていたことに注目しつつ、安部はその論評の言葉が、右記の試みを促していたこと、さらには、「燃えあがる緑の木」の結末に至る展開の描写に

も影響を与えていたことを指摘する。そのことを通して、「燃えあがる緑の木」が、安部のその言葉に対する遅れた応答としての意味を持つ作品であったことを明確にする。

## 二

「燃えあがる緑の木」の創作動機に関して、大江は、安部との「対談」（平成二年十二月十七日～十九日『朝日新聞』夕刊）の中で次のように説明している。

大江（略）たまたま僕はいまイーツの「動揺」、揺れ動くという詩を中心に小説を書こうとしています。あの決まった世界と人間の解釈でなく、揺れ動くところを書きたい。

安部 その揺れ動きが、書くということなんだろうね。

大江 ④「万延元年のフットボール」を出したとき、安部さんは認めてくださった上で、しかし大江が共同体と、というようなものを信じているとするならば、自分の敵だと警告しておくこと書かれた。あのときはよくわからなかったことが、いまはよく分かる気がしています。

この引用箇所から見えてくることは、昭和四十二年に「万延元年のフットボール」を発表した時に、安部が、傍線部④のように「警告」と受け取られる見解を表明したこと、「対

談」が行われた平成二年になっても、大江はそのことをずっと覚えていたこと、そして、「対談」があつた平成二年の時期に既に、「燃えあがる緑の木」を「書こうとして」いたことである。となると、「燃えあがる緑の木」において、「世界と人間」の「揺れ動くところ」を表現しようとするのは、一つには、安部の「警告」の意味を理解できるようになった大江が、その「警告」に応えるべく、「共同体」というようなものを信じている」わけではないことを示そうとしたからであると思ふ。勿論、安部の「警告」がなかったとしても、大江は「揺れ動くところ」を表現したことだろう。ただ、安部の「警告」が、その表現の意欲を掻き立てるよい刺激となっていたことは、「対談」の文脈から読み取れる。

では、安部の「警告」は、どの作品に載せられているのか。『安部公房全集』（平成九年七月～平成二十一年三月、新潮社）を調査してみても、傍線部④の通りに記述した安部の作品は見当たらなかった。ただ、「万延元年のフットボール」に対する書評である、安部の「怖い穴ぼこ——大江健三郎『万延元年のフットボール』（昭和四十二年十一月『文芸』以下「怖い穴ぼこ」と略記）における後掲の傍線部⑤の記述が、傍線部④と類似していることから、特に、傍線部⑤の「挑戦状」という書き方が、傍線部④の「自分の敵だ」という言い回しと重なることから、大江は、傍線部⑤の記述を読み、

その記憶に基づいて傍線部④のように話したと判断できる。そこで、安部が、「怖い穴ぼこ」の中で、「挑戦状」という激しい言葉を用いた経緯を明確にする必要がある。ただし、その前に、「怖い穴ぼこ」では、全体的には「万延元年のフットボール」が評価されているので、その理由を説明することから始める。

そのために、「怖い穴ぼこ」の次の箇所を目を向ける。

主人公は、最初はきわめて受動的に——主人公の分身である「弟」にさそい出される形で——体験として触れることの出来る歴史の根源である、山深い郷里へと辿り着き、そこで歴史的必然を再確認しようという「弟」の、まことに暴力的な、地獄絵の実験に立ち合わされることになるわけだ。／歴史が、現実の行為によって、現実と等価的に再現され、展開されていく、そのあたりの構造は、さすがに大江君らしく見事なものである。

この「見事なもの」という安部の賞賛は、「万延元年のフットボール」の次のような話に対するものであろう。——「主人公」である根所蜜三郎の「弟」である鷹四は、安保闘争の挫折の後、蜜三郎らとともに、故郷の四国の谷間の村に移住する。現在の谷間の村は、スーパーマーケットに経済的に支配されていたのだが、鷹四は、自らの曾祖父の弟が中心となってこの村で約百年前に起こした万延元年の一揆の再

来を目指して、谷間の村全体を巻き込んで、スーパーマーケットを襲撃し、商品を略奪する運動を起こす。鷹四が、このような、暴力的で破壊的な行為をするのは、白痴の妹を死に追いやった嘗ての罪を償うための自己処罰の願望からであった、ということが後に判明する。鷹四は、最後に、自らの罪を蜜三郎に告白して倉屋敷で自殺することになる。蜜三郎は、正しく、鷹四の「暴力的な、地獄絵の実験に立ち合わされ」たのであり、それを受けて、自らの無力と敗北とを痛感する。

こう要約すれば、スーパーマーケットを襲撃する鷹四の「行為」は、「歴史的必然を再確認」すべく、「歴史」上の人物である曾祖父の弟の「行為」を「再現」しようとしたものであったとまずは言える。しかし、単純な「再現」ではない。鷹四の「行為」は、白痴の妹を死に追いやった自らの罪を告白するという、曾祖父の弟の行為がもたらした「展開」とは異なる、新たな「展開」をもたらしている。つまり、「万延元年のフットボール」には、過去の「行為」が、現在の「現実の行為」によって「再現され」、かつ、新たな形で「展開され」ていく「構造」がある。安部がこの作品を高く評価したのは、こうした「構造」の「見事」さ故であった。

もつとも、それだけではない。安部が、この作品を評価したのは、安部自身が、この種の「構造」に関心を持っていた

からでもあるだろう。このことを、「万延元年のフットボール」や「怖い穴ぼく」と同じ昭和四十二年に上梓された『燃えつきた地図』（昭和四十二年九月、新潮社）によって確認したい。紙幅の都合上、あらずじ紹介は省略するが、「既知の世界に閉じ込められ」る恐怖に取り憑かれるようになって「ぼく」が、「自分の世界」を取り戻そうと決意するところで締め括られている。

しばしば指摘される通り、夫の行方を捜して欲しいという波瑠からの依頼を受けて、「ぼく」が、波瑠の家に向かうべく、坂道を上っていく冒頭の場面と、記憶喪失の状態になった「ぼく」が、「左に大きくカーブして」いる、冒頭と同じ坂道を上っていく結末近くの場面とを見比べれば、「ぼく」の目に映る町の光景——「道の表面は、アスファルトではなく」から始まる光景——が、ほぼ同じものとして、しかも、かなりの紙幅を費やして描写されていることに気付く。結末近くの「ぼく」の目に映る現実が、その時点から見れば過去にあたる冒頭の「ぼく」の目に映る現実を「再現」したもものになっているのである。ただし、そうであるだけにかえて、「ぼく」の対応が、以下の如く、冒頭の場面と結末近くの場面とで決定的に相違することが際立ってくる。

まず、冒頭の「ぼく」の移動手段は車であった。移動の途中で、「買物籠をさげた四、五人の女たちが、道幅いっぱい

にひろがって」いたので、「軽くホーンを叩いて、女たちの間を通りぬける」のだが、それと同時に、「急ブレーキを踏ん」だ。それは、「ローラースケートを尻にしいた少年」が「すべり降りて来」て、「ぼく」の車が少年と接触しそうになったからだ。しかし、「ぼく」は、「横倒しになった少年の、青ざめひきつった顔」を見ても、車から降りることなく通り過ぎていく。それに対して、結末近くの「ぼく」の移動手段は最初のうちは徒歩であった。移動の途中で、冒頭の場面と同じように、「買物籠をさげた四、五人の女たちが、道幅いっぱい」にひろがって」いたが、それを目にするだけであり、「ローラースケートを尻にしいた少年」が「すべり降りて」きたのであるが、「ぼく」は「あわてて道をゆずった」。

このような、冒頭と結末近くの「ぼく」の対応の相違は、「ぼく」の心の状態の変化を表している。冒頭の「ぼく」は、町の中を移動する人物の安全に十分に配慮することなく、目的地に早く到着することを第一に考えていた。つまり、自己中心的であるが、旺盛な活動意欲を持って行為できる状態であった。それに対して、結末近くの「ぼく」は、町の中を移動する人物に、むしろ、遠慮するようになっていた。つまり、嘗ての活動意欲は失われ、不安を抱えていることが見て取られる状態になっていた。

したがって、この作品では、冒頭の場面と結末近くの場面の、「ぼく」の目に映る光景をほぼ同様のものとしてあえて表しつつ、それにより、「ぼく」の変化を際立たせ、結末近くの「ぼく」が不安を抱える状態になっていたことを強調した。その上で、「ぼく」が、「既知の世界に閉じ込められ」る恐怖に取り憑かれるようになるという展開、さらに、その恐怖の中で、「自分の世界」の獲得を目指そうとするという展開にした。こう整理すると、『燃えつきた地図』は、正しく、過去の行為が現在の「現実の行為」によって「再現され」、新たな形で「展開されていく」「構造」を備えていたことが明白になる。

このように、『燃えつきた地図』を読めば、こうした「構造」に対する関心が、「怖い穴ぼこ」を発表した昭和四十二年の安部の中にもあったことを知ることができる。安部が、「万延元年のフットボール」を評価したのは、安部自身の中に、この種の関心があったからでもある。

### 三

もっとも、安部は、「怖い穴ぼこ」で、「万延元年のフットボール」の「構造」の「見事」さを賞賛するのであるが、その一方で、登場人物の「根所」という姓に着目して考えれば、

この「構造」のうち、「歴史」が新たな形で「展開」されていくという側面が、結局のところは、軽視されていたのではないかと疑ってもいた。続いて、安部のその疑念を取り上げ、安部が「挑戦状」と書き記した経緯を説明する。

そのために、安部が、「怖い穴ぼこ」において、「万延元年のフットボール」の「主人公の一家の姓が、とりもなおさず「根所」であり、代々その山あいの部落を支配して来た、その姓に相応しい一族の出身者であり、歴史のすべてが、その一族の血を通じて現われ、完結して」いることに言及していること、その上で、「この根所を、もし主人公と同じ視点で固定させてしまうとすれば、歴史はたちまち弁証法を否認して、神話へと傾斜して行かざるを得ない。登場人物たちは、一瞬その動きをとめ、宿命を彫り込まれた星座の物語のように、天に糊付けにされてしまうのだ」と述べていることに注意する。ここで、安部が問題にしていることは、「万延元年のフットボール」では、「主人公の一家の姓」が、ある場所に根を下ろすという意味を持つだろう「根所」であり、その姓に相応しく、「根所」「一族」の間人たちが「山あいの部落」(論者注——「根所」の間人も含む「部落」)の中心として定着し、「部落」を支配していたこと(↓、「歴史のすべて」)がその人間たちの影響のもとで形作られていると見えることである。その場合、「主人公」の「根所」蜜三郎と「同じ

視点」——結末でアフリカに行くとはいえ、それまでの間は、「臆病な傍観者」として「倉屋敷に閉じこもり、自分の世界に没入しようとする蜜三郎の「視点」——で、「根所」「一族」の人間たちが「部落」を支配する状態を「固定」化させてしまうのであれば、この作品は、蜜三郎や鷹四といった「根所」「一族」の人間も含む「部落」内の人物が、「根所」「一族」の人間たちの影響力から抜け出せず、それにより、新たな「歴史」を築いていけないままで終わる「神話」であったことになる、安部には思えた。そこで、安部は、「万延元年のフットボール」がその種の「神話」であったのか否かと問うことにこだわることになる。

安部は、この問いに思いを巡らせながら、「挑戦状」という言葉を用いるに至った。そのことは、次の箇所**の傍線部⑤**に示されている。

(略)それとも、このぼくのこだわりには、あんがい、地獄絵ににじむ「優しさ」の色を、曖昧な自己慰安のための色彩だとして斥けた、主人公の開眼に際しての語気の激しさに原因するものがあつたのかもしれない。／じつは、もうかなり前、大江君の好きな、ノーマン・メーラーよりも、ヘンリー・ミラーの方が、はるかに優れていると強く主張し、その理由として、ミラーの文体にひそむ一種の「優しさ」をあげたことがあるのだ。そ

のお返しのもりか、どうか、今度のぼくの小説『燃えつきた地図』の推薦文に、大江君は「優しさ」のこもった作品だと書いてくれた。こう書いておいた方が、女性の読者が増えますよ、と、大江君はうれしそうに笑っていたが、<sup>⑥</sup>もし『万延元年のフットボール』が単なる神話であり、結末での主人公の回生が、根所の絶対化を意味するものだとしたら、ぼくは大江君の微笑を、はつきり挑戦状として受取らねばならないことになるわけだが……

ただし、この箇所では、安部が先の問いにこだわる背後の事情も明かされているので、傍線部⑤について論じる前に、その事情を確認しておくことにする。

安部は、ヘンリー・ミラーの「文体」に「優しさ」が潜んでいるという理由から、大江の好きな「ノーマン・メーラーよりも、ヘンリー・ミラーの方が、はるかに優れている」と、大江に主張したことがあつたという。その「お返し」のためであるのか、「万延元年のフットボール」と同時期に刊行した安部の『燃えつきた地図』に対する大江の推薦文には、『燃えつきた地図』は「優しさ」のこもった作品であるとする記述があつた。ただ、「万延元年のフットボール」には、主人公の蜜三郎が、ある「地獄絵」を目にして、その「地獄絵」ににじむ「優しさ」の色を、「曖昧な自己慰安のた

めの色彩だ」と「語気」「激し」く「斥けた」場面があったので、安部は、『燃えつきた地図』は「優しさ」のこもった作品であるとする推薦文を書いたと、直接に自らに伝えた時の大江の「微笑」に違和感を持つようになった<sup>(2)</sup>。これが、安部が、先述の問いにこだわった背後の事情である。

こうした事情から、安部は、その問いに基づいて、傍線部⑤のへ～のように仮定することになる。ここで、この仮定の中に含まれる、「神話」と「結末での主人公の回生」について説明する。まず、「神話」の意味は、先述した通りだが、それは、傍線部⑤の文脈から、「根所の絶対化」を表した話とも言い換えられる。また、「結末での主人公の回生」は、「万延元年のフットボール」の「結末」で、「主人公」の蜜三郎がアフリカ行きを選択し、新たに生き直そうとしていることを表している。

これらのことから、傍線部⑤のへ～では、「万延元年のフットボール」は、作品全体として「根所の絶対化」を表した話であり、「結末」で、蜜三郎が、アフリカ行きを選択し、新たに生き直そうとしていたことすらも、「根所の絶対化」を意味していたのであれば、と仮定していたことになる。安部は、この仮定が正しいのであれば、大江の先の「微笑」は「挑戦状」であるはずだと考えることになった。

安部がこのように考えたのは、仮に「万延元年のフットボール」が、「根所の絶対化」を表した話、つまり、蜜三郎や鷹四といった「根所」「一族」の人間も含む「部落」内の人物が、「根所」「一族」の人間たちの影響力から抜け出せない話であったのであれば、そうした作品を書く大江の思想的な立場は、自らのそれと相容れないことが確実であると感じられたからに他ならない。実際、『燃えつきた地図』は、先述した「構造」によつて、「ぼく」が「自分の世界」の獲得を目指そうとするところを強調しており、右の「根所の絶対化」を表した話の対極に位置付けられるものである。そこで、安部は、「万延元年のフットボール」を「根所の絶対化」を表した話として執筆する大江であれば、自らの思想的な立場と対立し、かつ、『燃えつきた地図』にも内心では批判的であったはずであると考え、『燃えつきた地図』の推薦文に関する大江の先の「微笑」にも「挑戦状」の意味が含まれていたに違いないと見なすことになった。

#### 四

こうして、安部は、「怖い穴ぼこ」において、傍線部⑤のように記した。それに反応した「対談」当時の大江は、「共同体というようなものを信じている」わけではないことを

示す作品にすべく、「燃えあがる緑の木」において、「世界と人間」の「揺れ動くところ」を表現する試みにさらに邁進することになった<sup>(3)</sup>。

ただし、こう説くだけでは十分ではない。というのも、後述する通り、「燃えあがる緑の木」の結末に至る展開は、「万延元年のフットボール」の結末に至る展開を受け継ぎつつ、それを改変したものになっているのだが、このように、受け継ぎ、改変するのめまた、安部の傍線部⑤の記述の影響による可能性があるからだ。このことを説明するために、「万延元年のフットボール」では、「結末での主人公の回生」ですら「根所の絶対化」を意味しているとも解釈できる、そして、それ故に、作品全体として「根所の絶対化」を表している」と解釈できる描かれ方になっていることを論述する。

「万延元年のフットボール」では、主人公の蜜三郎とその妻の菜採子との間の赤んぼうが、障碍を持って生まれた。菜採子はそのことに打ちのめされて、アルコールに依存していたのであるが、鷹四と出会ってから、蜜三郎との関係が停滞していたこともあり、鷹四の行動力に惹かれ、生きる気力を取り戻す。やがて、<sup>⑥</sup>鷹四と肉体関係を持つ。その後、鷹四が自殺して、大きな衝撃を受けるのだが、鷹四の死後に、鷹四との子供を宿していたことを知り、その子供を生み育てることを決断する。一方、蜜三郎は、これまで、鷹四や曾

祖父の弟——四国の谷間の村を根拠地として活動した、同じ「根所」「一族」の人間——の暴力的・破壊的な生き方への敵意から、彼らとは反対の消極的な生き方をあえて選択し、谷間の村の倉屋敷に主に引きこもる生活を送っていたのだが、鷹四の死後、鷹四や曾祖父の弟を正當に理解することが必要であると認識したので、ある日、倉屋敷の地下倉で内省する。蜜三郎は、この内省の中で、鷹四や曾祖父の弟や菜採子が、「自分の内部の地獄に耐えている人間」であったこと、そうであるにもかかわらず、自らは彼らの苦悩に何の想像も働かせてこなかったことに思い至る。そして、消極的な生き方をして、自己の世界にのみ没入してきた自らの無力と敗北とを痛感するようになる。夜が明けた頃、菜採子は、蜜三郎が、地下倉での内省を終えたことを知り、「押えつけた激しい緊張におののきながら、蜜三郎に向けて、蜜三郎と菜採子との間の障碍を抱えた子供と、鷹四と菜採子との間のこれから生まれてくる子供とを一緒に育てながら、「やりなおすこと」ができないかと話しかけてきた。その上で、蜜三郎が以前から依頼されていた「アメリカ派遺動物採集隊の通訳責任者」の仕事、鷹四や曾祖父の弟と「共有するものを確かめ」るためにも、引き受けた方がよいと、蜜三郎に提案した。蜜三郎は、最初のうちは躊躇いを覚えたのであるが、地下倉から出て菜採子と向き合った時に、蜜三郎の内

部に「われわれは一緒に生きてゆくほかはないのだ」という「単純な声」が「響いて」きた。そこで、その「一緒に生きていく」という思いを支えることにより、また、鷹四や曾祖父の弟が体現していた「積極的」な生き方を継承することへの潜在的な期待が生まれたこともあり、その仕事を引き受け、アフリカで懸命に働こうと決意する。蜜三郎は、<sup>⑦</sup>四国の谷間の村を離れて、幾多の困難が待ち受けているだろうアフリカで、眼前の生活をともに懸命に送るという点で遠く繋がる菜採子や子供たちのことを思い浮かべながら、しばらくは一人で働き、生き直そうと考えるのである。

このあらずじからも分かる通り、また、拙稿「大江健三郎『万延元年のフットボール』論——「再生への始動」と過去の継承——」（令和元年十月『国語国文』）でも論じた通り、蜜三郎のアフリカ行きを決意、つまり、「結末での主人公の「再生」は、第一に、菜採子や子供たちと「一緒に生きてゆく」という思いを支えることによって、第二に、鷹四や曾祖父の弟が体現していた「積極的」な生き方を継承することへの期待が生まれたことによってもたらされた。

ここで、第一に関して付言すれば、菜採子と蜜三郎は結婚しており、結婚後の蜜三郎の姓も「根所」であると記されているので、菜採子の姓<sup>④</sup>、菜採子と蜜三郎との間に生まれた子供の姓はともに、作中で明記されていないが、「根所」

であるだろうと、さらには、菜採子と鷹四との間の子供の姓も「根所」になるだろうと、読者が想像できる描かれ方になっている。つまり、この作品では、菜採子と蜜三郎と二人の子供たちが、「根所」の一員として「一緒に生きてゆく」ことになると思わせる結末、それ故、「根所の絶対化」を連想させる結末になっている。また、第二に関して付言すれば、この作品の結末では、蜜三郎が、鷹四や曾祖父の弟という、「根所」「一族」の人間の生き方からの影響のもとで、アフリカに向かおうとすることが示唆されてもいた。この結末もまた、「根所の絶対化」を連想させる。

「結末での主人公の再生」は、一見すると、「根所」家や「根所」「一族」の人間の影響を断ち切って、新たな「歴史」を築いていくことを可能にする決意であると映る。しかし、「万延元年のフットボール」の本文から、この「再生」に至る過程を丁寧に辿ってみれば、その「再生」は「根所の絶対化」を意味しているとも解釈できる、それ故に、作品全体としても「根所の絶対化」を表しているとは解釈できる描かれ方になっていた。

ところで、「燃えあがる緑の木」の結末に至る展開と、「万延元年のフットボール」の結末に至る展開との間に共通点がある。それは、次の二点である。(一)傍線部<sup>②</sup>と<sup>⑥</sup>で示した通り、「たかし」という読み方をするだろう名前を持つ

男性（論者注——「万延元年のフットボール」では鷹四、「燃えあがる緑の木」では隆、すなわち、ギー兄さん）と肉体関係を持った人物（論者注——「万延元年のフットボール」では菜採子、「燃えあがる緑の木」ではサッチャン）が、その男性が亡くなった後に、その男性と結婚していたわけではなかったけれど、その男性との間の子供を授かったことを知り、そのように知ったところで、つまり、出産以後を取り上げる前に、作品を終えている点、（一）傍線部③と⑦で示した通り、四国の村で生活していた人物（論者注——「万延元年のフットボール」では蜜三郎、「燃えあがる緑の木」では教会員）が、今は亡き「たかし」の存在や言動からの影響のもと、最後にその四国の村から離れることを示唆して、作品を終えている点である。

こうした共通点があることを軽視すべきではない。そのことを確かめるために、話をやや遠回りさせることになるが、尾崎前掲書を参照して、大江が、「燃えあがる緑の木」のギー兄さんを、「万延元年のフットボール」の鷹四と深い繋がりを持つ人物として意識しながら、描写していたことを説明する。

もともと、「燃えあがる緑の木」の隆に与えられたギー兄さんという名前は、大江の「懐かしい年への手紙」（初出は『懐かしい年への手紙』（昭和六十二年十月、講談社））に登

場するギー兄さん（論者注——以下では、「懐かしい年への手紙」のギー兄さんを先のギー兄さんと呼ぶ）の名前を直接に受け継いだものであることが、作中で説明されている。ところで、「懐かしい年への手紙」の先のギー兄さんは、嘗て自動車事故を起こしたことがあったのだが、その後、同乗していた女性が死んだ。この女性の死については、交通事故によるものである可能性も十分に考えられる死に方であったのだが、先のギー兄さんは、自らが女性を殺害したと主張して、罪を進んで引き受けようとした。これと同様に、「万延元年のフットボール」の鷹四もまた、交通事故を起こした後同乗していた女性が死んだのだが、交通事故による死であった可能性もある女性のその死を、自らが殺害したことによるものだと主張し、進んで罪を引き受けようとした。つまり、自動車事故をめぐる先のギー兄さんと鷹四の行為や態度は、ほぼ共通していた。それは、「懐かしい年への手紙」では、作家の「僕」が登場するのだが、その「僕」が、先のギー兄さんをモデルにして「万延元年のフットボール」の鷹四を書いたという設定にしていたからだ。

このように、「燃えあがる緑の木」のギー兄さんは、「懐かしい年への手紙」の先のギー兄さんの後継者であり、かつ、「懐かしい年への手紙」では、その先のギー兄さんが「万延元年のフットボール」の鷹四のモデルとされていた。そのた

め、大江が、「燃えあがる緑の木」のギー兄さんを、「万延元年のフットボール」の鷹四と、深い繋がりを持つ人物として意識しながら、描写していたことは疑いない<sup>5)</sup>。となれば、同じ「たかし」という読み方をするだろう名前を持つそのギー兄さんと鷹四に関係する(一)と(二)の共通点に、大江が無自覚であったはずはない。そのため、この共通点を重視すべきである。そこで、(一)・(二)の共通点を踏まえ、(一)・(二)に関わる相違点をそれぞれ(1)・(2)として挙げ、その相違の意味を考察する。

(1) 「万延元年のフットボール」では、先述の通り、菜採子は、今は亡き鷹四との間の子供を宿したのだが、菜採子には、夫である蜜三郎との間の子供もいる。そして、菜採子と蜜三郎と子供たちは、「根所」の一員として「一緒に生きてゆく」ことになると思像できる結末、つまり、「根所の絶対化」を連想させる結末になっていた。それに対して、「燃えあがる緑の木」では、サッチャンには、蜜三郎や、菜採子と蜜三郎との間の子供に該当する存在、つまり、夫や、夫との間で生まれた子供がいなかった。したがって、ギー兄さん亡き後のサッチャンは、菜採子よりも、孤独な、しかし、家という既存の枠組みに縛られることのない状況下で生きていくことが暗示されている。しかも、サッチャンは、ギー兄さんと結婚していたわけではなく、かつ、サッチャンとギー兄さ

んの姓が作中で示されているわけでもないのに、サッチャンの姓が、ギー兄さんと同じであると想像できる根拠は作中にはない。つまり、ギー兄さんの姓を「絶対化」していると読める描き方になっていない。

(2) 「万延元年のフットボール」では、四国の谷間の村から離れる蜜三郎の行為に影響を及ぼしたのは、鷹四や曾祖父の弟という、「根所」「一族」の人間であったので、そのように離れるところで締め括る結末は、やはり、「根所の絶対化」を連想させるものになっていた。それに対して、「燃えあがる緑の木」では、四国の村から離れようとする教会員の行為に影響を及ぼしたのは、ギー兄さんという、教会員と姓の異なる、非血縁者であったのであり、そのように離れるところで締め括る結末は、ギー兄さんの姓の「絶対化」とは無縁なものであった。

以上の(一)と(二)の共通点と、それに対応する(1)と(2)の相違点から導き出せる結論は、「燃えあがる緑の木」の結末に至る展開では、「万延元年のフットボール」の結末に至る展開を土台にしつつ、「根所の絶対化」に相当する意味を消し去っている、ということである。このことは、大江が、安部の傍線部⑤の「結末」や「根所の絶対化」という言葉を記憶していたので、その記憶に基づき、「万延元年のフットボール」の「結末」に至る展開を下敷きにした、「燃

えあがる緑の木」の「結末」に至る展開を作成しつつ、前者の展開にあった「根所の絶対化」に相当する意味を後者で消し去った可能性がある、ということの意味している。この場合、大江は、「対談」での咄嗟のやりとりであるために、安部の傍線部⑤の記述を傍線部④のように大雑把に言い換えたとはいえ、実際には傍線部⑤の記述を正確に記憶しており、そのために、傍線部⑤の記述に直接に応答すべく、右記のような「燃えあがる緑の木」の「結末」に至る展開を作成した、ということになる。

勿論、「対談」当時の大江が、安部の傍線部⑤の記述を正確には覚えてはおらず、「結末」や「根所の絶対化」という言葉を意識していなかったことも考えられる。とはいえ、その場合でも、大江は、傍線部④を視野に入れながら、「燃えあがる緑の木」を「書こうとして」いたことは間違いのないことであるので、大江が、「燃えあがる緑の木」において、「共同体というようものを信じている」と読める「万延元年フットボール」の箇所をあえて受け継ぎつつ、しかし、そのように「信じている」とは読めないように改変することで、安部の「警告」に応答しようとした、という可能性も十分に考えられる。

この場合、大江は、安部の傍線部⑤の「結末」という言葉を覚えていなかったことになるので、「燃えあがる緑の木」

を執筆するにあたって「万延元年のフットボール」の「結末」に至る展開に着目したのは、「万延元年のフットボール」の「結末」に疑義を呈した安部の言及の影響というよりは、大江自身の判断によるものであったことになる。具体的には、大江は、「万延元年のフットボール」の結末に至る展開が、「根所」家や「根所」「一族」の人間が形成する「共同体」の価値を「信じている」と受け取られかねない展開になっていると、自分自身で判断したので、「燃えあがる緑の木」において、その展開を受け継ぎつつ、そのように「信じている」とは読めないように改変したことになる。これは、要するに、傍線部⑤の記述を正確に覚えていなかったものの、「燃えあがる緑の木」の結末に至る展開が、結果として傍線部⑤の記述に応答したものになった、ということである。

以上の二つの可能性を否定するならば、傍線部④もしくは傍線部⑤の記述に対応するような形で、つまり、「万延元年のフットボール」の展開を受け継ぎつつ、改変するという形で、「燃えあがる緑の木」の展開を作成していることの意味を説明し難い。それ故、大江が、安部の傍線部⑤の記述を正確に覚えていたのか否かは定かではないが、いずれにせよ、傍線部⑤の記述は、「燃えあがる緑の木」の結末に至る展開を形成しようとする大江の試みを、直接的もしくは間接的に導いていたと理解できる。

## 五

大江は、「安部公房案内」(『われらの文学7』(昭和四十二年二月、講談社)「解説」)の中で、「きみにとって現在、もつとも重要な、同時代の作家は誰であるか? と問われれば、ぼくは、それは安部公房だと答えるだろう」、「自由人の持つ、生き生きとした、創造的な、尊敬すべき、大胆な、脅迫をも恐れぬ、傲慢な、心の確かさを持つている」と記している。「書き終えた、すべてを小説に、大江健三郎さん 全集出版の感慨」(平成三十年五月六日『読売新聞』)における「安部さんは一番好きな作家で、三島さんより断じて独創的な、大きい才能でした」という大江の回想からも、大江にとつて、安部がいかに偉大な存在であったのかということを知ることができる。

ただし、安部と大江との私的な関係は、安部が「怖い穴ぼこ」を発表した昭和四十二年より後に、悪化した。それは、『大江健三郎 作家自身を語る』(平成十九年五月、新潮社)によれば、「大学闘争の時期、安部さんから電話があつて、朝日新聞で学生たちを批判する対談を準備した、ともちかけられ」たのだが、大江は、その「批判」のための「対談」には反対であり、その申し出を断つたことから、口論となつたことが原因である。こうして、大江と安部は、絶交するこ

とになる。大江は、「それから、本気で仲直りすることがあつた、とは思いません」と打ち明けている。

もつとも、その『大江健三郎 作家自身を語る』で「あの人は、友人にしてもらうより、天才としてその作品を読んでいることで幸いでした」と語る通り、私的な関係がどうであれ、大江は、作家としての安部を一貫して尊敬していた。そう考えると、その安部からの「警告」であるのだから、その「警告」が以後も大江の記憶から消えなかつたのは、当然のことであつた。

しかも、安部は、大江が「燃えあがる緑の木」を執筆していた最中にあたる、平成五年一月二十二日に急性心不全のために死去した。安部の死を知つた時点で、「燃えあがる緑の木」をどれほど書き進めていたのかは定かではないが、「燃えあがる緑の木」三部作の発表が平成五年九月から平成七年三月までの間のことであるので、安部の死後になお新たに書き足す部分はあつただろうし、また、既に書いた部分を修正することもできただろう。前掲の辻井との「対談」で、大江は、「尊敬する作家」である「安部さんの死の報に接した日からずっと家で安部さんの本を読んでいた」と述べていた。安部が死去してから、つまり、「燃えあがる緑の木」を執筆していた時期に、大江は、安部が残した作品の言葉と向き合おうとしていたことになる。そのため、安部の

「死の報に接」することによってさらに、安部の言葉を自らの創作の糧にすべく、「揺れ動くところ」を表現しようとする思いを、あるいは、「万延元年のフットボール」の結末に至る展開を作りかえる形で、「燃えあがる緑の木」の結末に至る展開を執筆しようとする意図を、強くしたのではないかと推定することもできる。

以上、「燃えあがる緑の木」の成立の背後に、安部と大江との浅からぬ因縁があったことを論じてきた。ちなみに、晩年の安部はノーベル文学賞の最有力候補であった。そのことは、安部の死後、ノーベル文学賞の選考を行うスウェーデン・アカデミーのノーベル委員会のペール・ベストベリー委員長が、読売新聞の取材に応じ、安部が「急死しなければ、ノーベル文学賞を受けていたでしょう。非常に、非常に近かった」と強調した（平成二十四年三月二十三日『読売新聞』）ことから知られる。尾崎前掲書第七章では、安部の妻である「安部真知は、ノーベル賞受賞の期待とプレッシャーが晩年の安部公房を心身ともに追いつめたと九三年の九月」に、尾崎に語ったことを紹介しているが、その安部が平成五年に急死して一年余りの時間が経過した時期に、つまり、大江が「燃えあがる緑の木」の第三部を執筆していた平成六年十月十三日に、スウェーデン・アカデミーは、同年のノーベル文学賞を大江に授与すると発表した。安部の言葉を一つの

刺激剤にした「燃えあがる緑の木」の創作活動を行っている最中に、安部が急死したために受賞を逃したノーベル文学賞を大江が受賞したのであるから、勿論、それは偶然の結果であるとはいえ、安部と大江との因縁の深さを思わせる。

ただし、最後に付言しておきたいことは、大江は、安部の傍線部④もしくは傍線部⑤の記述を意識しながら、「燃えあがる緑の木」において、「共同体というようなものを信じている」わけではないことを示す作品として、「ある決まった世界と人間」の「揺れ動くところ」を表現したのだが、そうは言っても、「共同体」の完全な解体を求めていたと片付けることもできない、ということである。そのことは、例えば、「森をふくむこの地域」の「世界モデル」において、「谷間から外に出て行く流れ」は、「生の勾配にそっているはず」であるとすると、結末のサッチャンの先述した感想から読み取られる。建築家の「荒さん」は、以前に、大江自身をモデルにしたKという作家の四国の村を描いた作品には、「流出Ⅱ生、帰還Ⅱ死という（生と死の場）の仮想された地形」が構築されていると指摘しつつ、その「地形」を「世界モデル」と呼んでいた。サッチャンは、この「世界モデル」を踏まえて、教員が四国の村から離れることを、「生の勾配にそっている」と、すなわち、「流出Ⅱ生」に該当すると位置付けたことになる。このように、サッチャンは、この「世界モデル

ル」を尊重しているので、この「流出Ⅱ生」の背後には「帰還Ⅱ死」もまた存在するという見通しを、具体的には、「帰還Ⅱ死」が「この谷に生まれた人々が死を迎えると、魂は森の樹木の根から空に向かって昇っていく」という、この村に古くから伝わる信仰に基づく考え方を指しているのが、四国の村から離れた教会員の死後に、彼らの魂が、この村に戻ってくるという見通しを持つていると指摘できる。

ギー兄さんを中心とした「共同体」は表面的には解体した。しかし、その「共同体」を形成した人々の「魂」がこの場所に戻り、「森の樹木の根から空に向かって昇っていく」とする信仰が否定されているわけではない。つまり、「共同体」形成の基盤となる、その場所の力に対する畏敬の念が失われたわけではない。それ故、「燃えあがる緑の木」の結末は、何かしらのきっかけで、ギー兄さんを中心とした「共同体」とは異なる「共同体」が、この場所の力によって新たに形成される可能性があると思わせる書き方にもなっている。

それに対して、安部は、「共同体」に対する強い抵抗感を持つていた。そのことは、例えば、秋山駿によるインタビューに応じた「私の文学を語る」（昭和四十三年三月『三田文学』）において、「三島さんの小説、大江さんの小説で、拒否なさる面というのはどこでしょうか」と編集部の者に尋ねられた安部が、「強いて言えば、共同体コンプレックスかな。

もちろん、これは、僕自身をふくめて、現代作家すべてのアレクス腱だろうけど」と答えていることから確かめられる。安部は、「共同体コンプレックス」を拒否すべきものと見なしており、「共同体」に囚われない思想に親近感を持つていた。したがって、「燃えあがる緑の木」の先述した結末の書き方から窺われる大江の思想は、安部の思想とは質的に相違している。大江は、安部の「警告」に納得したとはいえず、「共同体」に対する激しい拒絶意識が大江に共有されていたわけではない。そのこともまた見落とすべきではない。安部の「警告」と「燃えあがる緑の木」との関係を知ることによってかえって、安部と大江における「共同体」に対する受け止め方の相違を、そして、安部とは異なる大江文学の特質を把握できる。

#### 注

(1) 大江は、『沖縄経験 大江健三郎同時代論集4』（昭和五十六年二月、岩波書店）「未来へ向けて回想する——自己解釈（四）」において、伊波普猷の『古琉球の政治』の中に、「それから田舎の村落へ行くと、今でも一字（昔の村）に一ヶ所の根所ねどころがあるが、根所は大方村落の真中であつて、之を中心として、家族的な村が出来た」という記述があつたので、それを「万延元年のフットボール」執筆のための参考にして、「四国の森のなかの村に、かつて強固であつた協同体の中心をなす家系を考え、そ

れに「根所」という姓をあたえた」と述べている。

(2) ただし、大江は、安部の『燃えつきた地図』を高く評価していた。例えば、大江と辻井喬による「対談」(平成五年四月『新潮』)において、大江が、三島由紀夫に向けてこの作品を褒めたことがあり、それによって、三島が不機嫌になったというエピソードを語っているのだが、こうしたエピソードからも、そのことは伝わってくる。そのため、『燃えつきた地図』の推薦文に關する大江の「微笑」が、安部に対する「挑戦状」の意味を込めた「微笑」であったとは考えにくい。この「微笑」から、そうした意味を汲み取り、大江に疑義を呈するのは、安部の過剰反応であるだろう。

(3) 「対談」によれば、「怖い穴ぼこ」が発表された昭和四十二年当時の大江には、安部の「警告」の意味が「よくわからなかった」のだが、「対談」が行われた平成二年の大江には、「いまはよく分かる」ようになったという。つまり、安部の「警告」に対する認識の仕方に変化が生じていた。大江はこのように変化が生じた理由を説明しておらず、断定ではないが、「対談」当時の大江は、「燃えあがる緑の木」を「書こうとして」おり、「世界と人間」が「揺れ動くところ」を表現する関心を強くするようになったので、そのことが、右の変化と関係していると推察できる。つまり、昭和四十二年当時の大江からすれば、蜜三郎が「根所」の根拠地である四国の村から離れて、アフリカに向かうところで終わる「万延元年のフットボール」が、何故に、

「共同体というようなものを信じている」と評されなければならないのか、理解できなかったのであるが、「揺れ動くところ」を表現する関心を強くするようになった平成二年当時の大江の立場からすれば、後述の通り、「根所」家や「根所」「一族」の人間の影響で、蜜三郎がアフリカ行きを決意したという結果になっている「万延元年のフットボール」では、「揺れ動くところ」が、自らのその関心を満たすほどには十分に表現されているとは言えず、「根所」家や「根所」「一族」が形成する「共同体」の価値を「信じている」と受け取られても致し方ない側面があると考えるようになったのではなからうか。

(4) 「万延元年のフットボール」が発表された昭和四十二年当時において(論者注——本稿を投稿した令和三年十月時点においても)、結婚後の夫婦がそれぞれ結婚前の姓を用いるということは、法的に認められていなかった。となると、「万延元年のフットボール」では、蜜三郎と菜採子が結婚していること、結婚後の蜜三郎の姓が「根所」であることが作中で明記されていることからして、妻である菜採子の姓も「根所」であるのだろうと想像できる。勿論、蜜三郎と菜採子とが、「法律上の要件(届出)を欠くが、事実上夫婦としての実体を有する関係」(『広辞苑』第四版(平成三年十一月、岩波書店))を意味する事実婚を選んだ夫婦であった可能性、それ故に、菜採子の姓が「根所」でなかった可能性も全くないわけではないが、作品内で、両者が事実婚を選んだという描写はない。事実婚を選んだという設

定であるなら、そのことを示唆する描写があつて然るべきであつて、そうした描写がなく、両者が結婚しているという事実のみが明かされているので、両者は、「法律上の要件」を満たす結婚をしたのだと理解するのが自然であろう。いずれにせよ、少なくとも、この作品では、読者に右記のように想像させる描き方になつているとは言える。

(5) 鷹四とギー兄さんの共通点として、次の三点が挙げられる。第一に、両者は、もともと、四国の村の外部に身を置いていたのだが、その内部に入り込み、やがて、リーダーと呼ぶべき存在になつたという点である。第二に、両者は、過去に罪を犯したのだが、そのことが現在の生き方の根本的な要因となつていくという点である。鷹四が、嘗て白痴の妹を死に追いやる罪を犯したので、その罪を償うための自己処罰の願望から、暴力的・破壊的な行為を繰り返す生き方をしていたこと、ギー兄さんが、学生運動をしていた頃、「襲撃隊の一員として、ひとりの男を殺してしまつた」(論者注——三人組で襲撃したのだが、実際に殺害を行ったのは、ギー兄さん以外の二人である。ギー兄さんは見張役であつた。しかし、その見張役から離脱しなかつた結果として、男が殺害されたのだと自責の念を覚えるようになった)ので、それ以来、「人を傷つける行為を起すことはしない」という思い、自分の命よりも他者の命の方が大切であるとする思いを実践する生き方をしていたことから、そのように纏められる。第三に、過去に罪を犯したことの影響によって形作

られた現在の生き方が、両者の死の要因にもなつていくという点である。鷹四が、自らの犯した罪を償う自己処罰の願望を実行に移し、自殺したこと、ギー兄さんが、「革命党派の、敵対セクトから投石されて」も抵抗することなく、むしろ、自らの死を進んで受け入れるようにして殺されたことから、そのように纏められる。こうした共通点があるのでなおのこと、鷹四とギー兄さんとの繋がりを大江は意識していただろうと指摘できる。勿論、鷹四とギー兄さんの相違点もある。その相違の中心となる点を挙げると、先述の通り、鷹四が暴力的・破壊的な行為を繰り返してきたのに対して、ギー兄さんが非暴力の信条を実行していたという点である。この点から、両者の人物像が対照的であることも分かる。大江は、暴力性を持った鷹四の生き方を反転させる形で、非暴力を貫き、他者に寄り添おうとするギー兄さんの生き方を描写していたのだろう。それにより、他者の思いに応えようと努めながらも、十分に応えられないのではないかと時に不安になり、動揺することが多いギー兄さんの人物像、すなわち、「世界と人間」の「揺れ動くところ」を表現しようとした「燃えあがる緑の木」の内容に相応しい人物像を作りあげていたと考えられる。なお、ギー兄さんの名前の表記は隆であり、鷹四ではない。大江が、「燃えあがる緑の木」において、隆という表記を用いた理由は何であるのか。「燃えあがる緑の木」の中でも詳しく言及されている、大江の小説「治療塔」(平成元年七月〜平成二年三月『へるめす』、原題「再会、

あるいはラスト・ピース」とその続編である「治療塔惑星」(平成三年一月〜九月『へるめす』)の中に、荒廃した地球を捨て、宇宙空間にある「新しい地球」へと脱出する宇宙船団を指揮した、木田隆という人物が登場する。この隆の兄は、荒廃した古い地球に残った繁である。進取の気性に富み、計画を着実に実行していく弟の隆と、今いる場所に留まる兄の繁とが対比的に描写されているので、隆は、「積極的」な行為者であった弟の鷹四を、繁は、結束でアフリカに行くとはいえ、それまでは消極的な生き方してきた兄の蜜三郎を、もとより両者の違いは小さくはないものの、意識して描写されていたことも考えられる。そうであれば、鷹四の人物像を受け継いだ人物として「治療塔」「治療塔惑星」の隆を描写したことを念頭に置いて、同じく鷹四の人物像を受け継ぐ「燃えあがる緑の木」の人物の名前として隆を用いたのかも知れない。また、「燃えあがる緑の木」において、鷹四という表記を用いなかった理由も推測しておきたい。「鷹」は、小形の鳥獣などを襲って食う鳥であるので、暴力性を持った鷹四の個性を彷彿とさせる言葉であり、「四」は「根所」家の四男であることを意味する言葉であるので、鷹四は、こうした個性と意味とを象徴的に示す名前であったと言える。となると、非暴力の生き方を貫くギー兄さんの名前として「鷹」という表記を用いることは、かつ、後述する通り、「燃えあがる緑の木」では、「根所の絶対化」に相当する意味合いを消し去ろうとしており、家に縛られない人物を描写しようとして

いたので、そうした人物であるギー兄さんの名前として「四」という表記を用いることは相応しくない。そのため、鷹四という表記を回避する必要があったのだろう。

#### 付記

大江の「万延元年のフットボール」と「燃えあがる緑の木」からの引用は、『大江健三郎小説』(平成八年五月〜平成九年三月、新潮社)に、それ以外の大江作品や大江の対談での発言の引用は、本文中に示した初出の紙誌・書籍による(ただし、大江と安部との「対談」は後掲の『安部公房全集』による)。安部の「燃えつきた地図」からの引用は、本文中に示した初版本に、それ以外安部作品や安部の対談での発言の引用は、『安部公房全集』(平成九年七月〜平成二十一年三月、新潮社)による。なお、引用箇所の傍線と／とへは論者によるものである。／は改行を意味する。また、引用に際して、本文中の傍点は省略した。

(たぐさり・かずま 本学教授)